



鴻乃川や中々訊一沃枯枝

聞幽子



志之為

二十一

川魚枯梗

花こんでうけと葉二ぶん編青いつとも
付と葉の汁よりうけと葉也

蒼鷺 鶺鴒

目の四白縁よりうけと葉二ぶん編青いつとも
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也

二十二

挽力井草

花白くうけと葉二ぶん編青いつとも
付と葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也

野鴈

目の四白縁よりうけと葉二ぶん編青いつとも
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也
うけと葉の汁よりうけと葉也



野鴈もあしきく宿多き野丁小 曼羨

百才直卷二

下系先の草指切て鴨乃息 來示



二十三

澤深

慈姑 葵姑 燕尾草

花ごうん中ニはごうんにてつまへ上ニま
うをくべー葉小深まをけ表ハ白保
まのけらぬま白保まのけら

鳧

鴨

目の内朱とみうらごうん背まの具と
くはぬらやをけ乳まの具上ニはまをり
まご小深まをくまごくべーむひごうん
してごうんまの具はまをくまをりて
府を付せまをやわてくまをりて
北月まのま上ニまをりて風物まをりて
まをりてまをりてまをりてまをりて
まをりてまをりてまをりてまをりて
まをりてまをりてまをりてまをりて
まをりてまをりてまをりてまをりて

二十四

石斛

花ごうんの中とごうんはまのけら
つごまをりてまをりてまをりて

鸕鷀

鸕 鳥鬼 水老鴉

目の内朱とみうらごうん背まの具と
くはぬらやをけ乳まの具上ニはまをり
まご小深まをくまごくべーむひごうん
してごうんまの具はまをくまをりて
府を付せまをやわてくまをりて
北月まのま上ニまをりて風物まをりて
まをりてまをりてまをりてまをりて
まをりてまをりてまをりてまをりて
まをりてまをりてまをりてまをりて
まをりてまをりてまをりてまをりて

石斛や鴨川の魚乃持鳥

素尺



小道野小今夏原より伝説

采田花



二十五

小蓮華

花白一ころん白縁をか加くくわりよ
ころんとは花の裾りり引くははころん
て花をころん白蓮華のどくはは
花を白くするのけははははは

文驢

目の内を朱とみ目のうらり裏つらん
て白とありころん〇ははと白縁
の上ははりまははり目のまはは朱の
うらりべははははははははははは
腹まは合まはははははははははは
毛をわりまはははははははははは
けははははははははははははははは
尾の方にははははははははははは
はははははははははははははははは
はははははははははははははははは

二十六

苦苣

是春菊也春高ノ野菊ニ非ス
又高野菊ト云俗名也
花はころんの奥にころんわり裾りりころん
はははははははははははははははは
つとまはははははははははははは
ははははははははははははははは

畫鳥

水鶏ニ作ハ是ニ非ス
目の内合まはははははははははは
はははははははははははははははは
はははははははははははははははは
はははははははははははははははは
はははははははははははははははは
はははははははははははははははは
はははははははははははははははは

よもや同く水鶏のやめを

音山



百和鳥卷二

鳥の一点しやうしやうきまは
ちやうきしやうきしん

連子



二十七

菊

白の葉はふん分 白の花は白の葉の具を
わくごらんくはくはくの内を朱は又又冊と
は又又又の具又合と又と又と又と又と又と
は又の具又又又とは又又又又又又又又又又又
花乃内は又又又又又又又又又又又又又又又
を朱小の葉は又又又又又又又又又又又又又又
又又又又又又又又又又又又又又又又又又又

雉子 夏雞

は黄足と葉の具は 黄足は黄足の内を朱は
わくごらんくはくはくの内を朱は又又冊と
は又又又の具又合と又と又と又と又と又と
は又の具又又又とは又又又又又又又又又又又
花乃内は又又又又又又又又又又又又又又又
を朱小の葉は又又又又又又又又又又又又又又
又又又又又又又又又又又又又又又又又又又

二十八

蓮

紅白あり紅の葉の具は又又又又又又又又
はくごらんくはくはくの内を朱は又又冊と
は又又又の具又合と又と又と又と又と又と
は又の具又又又とは又又又又又又又又又又又
花乃内は又又又又又又又又又又又又又又又
を朱小の葉は又又又又又又又又又又又又又又
又又又又又又又又又又又又又又又又又又又

鷺

は黄足と葉の具は 黄足は黄足の内を朱は
わくごらんくはくはくの内を朱は又又冊と
は又又又の具又合と又と又と又と又と又と
は又の具又又又とは又又又又又又又又又又又
花乃内は又又又又又又又又又又又又又又又
を朱小の葉は又又又又又又又又又又又又又又
又又又又又又又又又又又又又又又又又又又

いりちりとてつる目えは蓮行る



星花

あまの池の池渡り



竜舟

二十九

水葵

花も地もさだ上ぐんぞやゆりやきんぎょなど
あつごうんしほくへー葉小細きゆりより
ふゆふゆいづれもまのけいさきいれ少精る
あつれ合さうごう海よりまどろくしてうら
みごとく

水れ

は南肉をわり果のまらぬそんゆりも南肉を
わり果のまきゆりうらまらぬそんゆりも南肉を
うらまらぬそんゆりうらまらぬそんゆりも南肉を
うらまらぬそんゆりうらまらぬそんゆりも南肉を
うらまらぬそんゆりうらまらぬそんゆりも南肉を
うらまらぬそんゆりうらまらぬそんゆりも南肉を
うらまらぬそんゆりうらまらぬそんゆりも南肉を
うらまらぬそんゆりうらまらぬそんゆりも南肉を

三十

白昌

花も地もさだ上ぐんぞやゆりやきんぎょなど
あつごうんしほくへー葉小細きゆりより
ふゆふゆいづれもまのけいさきいれ少精る
あつれ合さうごう海よりまどろくしてうら
みごとく

鴛鴦

雄ヲ鴛鴦ト云 雌ヲ鴛鴦ト云
南肉をわり果のまらぬそんゆりも南肉を
わり果のまきゆりうらまらぬそんゆりも南肉を
うらまらぬそんゆりうらまらぬそんゆりも南肉を
うらまらぬそんゆりうらまらぬそんゆりも南肉を
うらまらぬそんゆりうらまらぬそんゆりも南肉を
うらまらぬそんゆりうらまらぬそんゆりも南肉を
うらまらぬそんゆりうらまらぬそんゆりも南肉を



周の羽水あやめくま白一行安也

三鳳

百和直巻二

川骨やうんのゆりも根をて

十成



三十一

洋蓬草

川骨 俗名

花をうすの具をぶ合泥りても入合葉を
葉をうすの具をぶ合泥りても入合葉を
葉をうすの具をぶ合泥りても入合葉を
葉をうすの具をぶ合泥りても入合葉を

三十二

南京梅

花を一えをうすの具をぶ合泥りても入合葉を
葉をうすの具をぶ合泥りても入合葉を
葉をうすの具をぶ合泥りても入合葉を
葉をうすの具をぶ合泥りても入合葉を

鵜渠

水鶏

皆有りて赤く先をうすの具をぶ合泥りても入合葉を
葉をうすの具をぶ合泥りても入合葉を
葉をうすの具をぶ合泥りても入合葉を
葉をうすの具をぶ合泥りても入合葉を

南京梅

花を一えをうすの具をぶ合泥りても入合葉を
葉をうすの具をぶ合泥りても入合葉を
葉をうすの具をぶ合泥りても入合葉を
葉をうすの具をぶ合泥りても入合葉を

鷄
甲九曜
並拍金盤

德雅



季昆

梅 雁
腥 化
南 南
京 京
操 操

巨 巫
峽 峽



三十三

金雀花

花合サ夫土の具ひて付立花乃花より
く朱をくぐり葉編を付立花乃
汁編をく
めちま入るのけりて

雞 離

目の四朱どみ背角とるの具上ニ合若
土のけとさうも枕肉も朱くせめりと多や
くり燕身白くく人仕立くは毛虫つひの
お
雌ごん仕立朱どみく入府袋のどく
字を付けを写とますお
雛さうく歌しものくは上ニ朱を
つけ後ごん毛虫は
黄くははる一流わりるまごうてのら
白く日暮かり

三十四

南燭

南燭 園天竹
花ごん仕立朱を葉編をくめり葉の汁
くま編を木朱どみ葉より

鸚鵡

背角とる目の四朱どみ背角とる
鳥はをりよりせりひのくあいう
くすあひ世ごんくく入毛を同切す
法つひれごん後ごんくす府袋
乃ごんははる

ゆりかやまも入相天木山

尺志



一四七鳥類三



あつちの青ねをゆれはのなる
ゆきのうられをゆりもるゆりもる

乗三

三十五

あつち

あつちのみけを差すのけけを二けん
ゆきをけけをまればけけをうらゆき
とる

刀鴨

鴨 鴨

あつちの青ねをゆれはのなる
ゆきのうられをゆりもるゆりもる
あつちのみけを差すのけけを二けん
ゆきをけけをまればけけをうらゆき
とる

三十六

剪春羅

鴨皮

あつちの肉色を光卵母はてはをゆき
ゆきをゆきをまればけけをうらゆき
とる

千鳥

鴨

あつちの肉色を光卵母はてはをゆき
ゆきをゆきをまればけけをうらゆき
とる

隅てとかんしよと水浦の

惠風



一八や海小て八消かひは

逸志



三十七

鸚尾

紫羅傘

いらいらの
いたわいいたわい海青のつばきだごんぐ
うらな中のあゆみあゆみの白をへい
あま編まのけいあま

鶺鴒

いらいら
目の四赤どみちらごんぐん
あま編まのけいあま

三十八

菖蒲草

佛耳叶

あま編まのけいあま
あま編まのけいあま

鷓鴣

紅鷓

あま編まのけいあま
あま編まのけいあま



鼠麴黄蒿開岸頭
春江漾了閑鷗
隨浪任風自在流

釋亮秀

百和やうらん柳のあかり

石中子
璋文



三十九

金線桃

花葉の白を付くは二節の金糸の如く
いとわりむ泥してより葉を洗ひて
しつらばをまじへ

鶴

田鳥 鴨 俗作

昔ながらの具は四角の朱をみいへて
葉の上へ朱をみいへてはわくまを
下後ごらんを色も同脊中葉は朱をみい
へてはわくまをみいへては白線の具
昔ながらの具のけり

四十

梅

棋 檝

白と他白線の具をすめりて上ごらん
をみいへては泥の朱をみいへては
ちりちりの具を付くはわくまをみい
へてはわくまをみいへては白線の具
大和の具は白線の具の具の具の具
くまの具の具の具の具の具の具の具
て丹の具の具の具の具の具の具の具

鶺鴒

鶺鴒 黄鶺鴒 倉庚 黄栗留
春鳥

昔ながらの具は四角の朱をみいへて
中ごらんをみいへてはわくまをみい
へてはわくまをみいへては白線の具
乃ちわくまをみいへては

号也东小院之月付修

雷堂
百里



四十の丸くはせ期日

音山

四十一

茶樹

茗 檟カセツセ 藪ヤブ

茶樹は木は細く葉は小なりて白くはては赤くもなりて
去る所の白く入核の葉は白くはては赤くもなりて
けりて付葉は細くも葉は小なりては茶樹のけり
してはては赤くもなりては茶樹のけり
ては赤くもなりては茶樹のけり

四十雀

鶺鴒

雀は鳥は小なりて白くはては赤くもなりて
去る所の白く入核の葉は白くはては赤くもなりて
けりて付葉は細くも葉は小なりては茶樹のけり
してはては赤くもなりては茶樹のけり
ては赤くもなりては茶樹のけり

四十二

福壽草

福壽草は草は小なりて白くはては赤くもなりて
去る所の白く入核の葉は白くはては赤くもなりて
けりて付葉は細くも葉は小なりては茶樹のけり
してはては赤くもなりては茶樹のけり
ては赤くもなりては茶樹のけり

とんだ鳥

とんだ鳥は鳥は小なりて白くはては赤くもなりて
去る所の白く入核の葉は白くはては赤くもなりて
けりて付葉は細くも葉は小なりては茶樹のけり
してはては赤くもなりては茶樹のけり
ては赤くもなりては茶樹のけり

肥わくく明へけくくや福壽草

鮮



直



孫子や孫の也凡そ鱗也

素丸

四十三

瞿麥

午麥

此鳥をばふあやの具付をあやうはこ
うんりてまぶさ入を二ぞん編を付する
くま編をまのけりといづれも風情つら
らどたやうとまべ

風鳥

此鳥はたけのこむしひより腹までとみらぬ
毛を虫取さうの具背中翅をうは上
朱をみかけ尾りくちうの具して毛を先
しやうにて人糞をへむ足合共作毛を
朱をうそとまべ
是をたけのこむしひより腹までとみらぬ
の毛粗くくちや又高耐る人まねなりと
いふも画ぬのうらむじまねるれはたけ
一丸

四十四

檀持

此鳥地をう上朱のてせよりわり分たし
まうくはあり葉のけ上三をうがはく
へ一葉編をうらぬをういづれも編を
まうけ

鶉

同の四朱をみふらとらんは角をのて頭
まうくはあり葉のけ上三朱をみかけ
出時朱をえはてう一尾付さへか白く
うんりてまぶさ一尾風切を仕を二子ね朱を
みらまうくはあり葉のけ上三をうがはく
へ一丸

嘆やこのんぞせんは鳥を垢

東正



今如月ハ鶴の如くはるわんもの事

七才
吉五郎

四十五

杏子 一名 甜梅

花より地多牛の具其の中に多牛は外多牛と
里多牛と云ふにて去りて其の具にて白いと
実へ一具朱をみ入るを粹と云ふ紅梅は外り
伴正節ふも軌也ゆも各別分るあり
言証付るべし

鶺鴒

鶺鴒は上三合若おけは月一用はち
うと多牛と云ふにてかから脊中合若
去りて朱をみ入るなり其の具にて去り
名にて羽風切多牛は去りて去りて去り
羽正節ふの上三合若と云ふなりけ若と云ふに
てくゆりも去りて去り

四十六

紫苑

花白く去りては去りて白梅茶の汁は去り
紫苑は去りて去りて去りて去りて去り
梅は去りて去りて去りて去りて去り
くまゆ去りて去りて去りて去りて去り
は去りて去りて去りて去りて去り
造と

鶺鴒 又 伯趙ノレ

鶺鴒は去りて去りて去りて去りて去り
背中一葉は去りて去りて去りて去り
凡切は去りて去りて去りて去りて去り



天鵝のうゝ老水のうゝや柳子車

坑堂 梅宇



月日星林のや枝の御柳

連子

四十七

柳

楊

徳

葉二どん深き或ハ小縁付ま白縁しを
虫へまべ一本葉うとりよたうとまのけ
くべー

三光

は浦足と葉路よりむひまをほきまてま
背中葉ははらととりて上三やまやを
くけ風切葉はは尾深きうてま上三細いん
まうとくべー下後ゆくまらんまごらん毛
うごりり

四十八

葉世仔登字

徳

徳

葉も他あふたぬりあふたぬり
相のむのはまけくくくべーは細きま
まあふたぬりのけ本葉まみくふ

きねとみ

は浦足と葉路より背中まぐらとあふたぬり
わいろくくくまうと風切葉はは二ま
まうは尾あふたぬり腹まぐらと
まごらんまうと下腹尾まぐらとま
まうとまうとまうと

鳥のついでにさくら

海市



令根



鳥のついでにさくら

惠風

四十九

紅梅

八重葉の古中二種を以て三つ葉を入り
花も地多々の具中より多々が尾介一葉
多々が内のを標よりごうんらまうす
合部一葉ごうんを白いとさうの具より
付一つがごうんの上を明朱の上を落
うべしとて朱をみよと実一木よりか
こましく記を略す

鴻鶴

背足は赤一肉色上朱を多々うすむ目
毛にして付わらわごうんらまうす
勢才よく多々は多々の腹の背中よりか
はま

五十

虎杖

花ごうんにて付多朱をみよと実入を
葉も地合よりごうんの上をさうら
け朱にて編をさう

わさぎ

背足は合朱上朱をみよと腹より脊中
くまうす朱をみよけ毛を府の
より下後ごうんらまうす
で合朱上朱をみよと腹を八回毛をさ

見てゆん虎杖わさぎの波

曼 羨





鸚鵡麻邊

鸚鵡邊

○